話題提供３

富山のなりわいの風景

奥（おく）　敬一（ひろかず）

富山大学准教授。東京大学農学部を卒業後、農林水産省森林総合研究所を経て、現職。富山大学地域連携推進機構地域づくり・文化支援部門長兼任。主に風景論に関する教育・研究に従事している。

ここまで２件話題提供いただいた中で、黒田さんは富山県人ではありませんが、長く五箇山に関わってこられたという立場からお話をいただきましたし、野原さんはまさに地元の方という立場、さらには行政の方の立場からお話しいただきました。私からの話題なのですけれども、タイトルは「富山のなりわいの風景」ということで主に農林業がテーマです。この富山の文化的な景観の中には一体どういう農林業の景観があるのかというお話をしようと思っています。

私が富山にやってまいりましたのは昨年です。今日のお話の趣旨としては、まず一つ目は富山県ビギナーが見つけた文化的景観です。外から来た非常に新鮮な目でこの約１年半余り、平日の時間があるときや休日などを使いながら、富山県内をうろうろとしていました。そんな中で見つけたもの、あるいは驚いたもの、そういったものの中から、これは文化的景観といえるのではないか、あるいは非常に面白い価値を持っているのではないか、そういうものをまずご紹介しようというのが趣旨です。

五箇山は日本レベル、国際レベルで非常に有名な資源になっているわけですけれども、私が紹介しようと思っている景観は、どちらかといえばややマイナーです。全くみんな知らないというほどではないのだけれども、普通の観光パンフレットやガイドブックにはあまり載らないかもしれない。そういったちょっとマイナーな感じのものをご紹介することになっていきます。

ただ、そうやってざっと回った感覚としては、私は富山という地域は文化的景観という意味では非常にポテンシャルが高いところだと思っています。ちょっと走れば、発見がすぐに出てくるような気がしていて、私も今日話す候補自体はたくさんあったのですけれども、きちんと取材する時間が十分取れなかったこともあって、ちゃんと

紹介できるのはわずかです。そういった意味では富山というのは文化的景観の宝庫のようなところではないかと思っています。

一つ先に謝っておきますが、県の東部のお話は今日ほとんどありません。残念ながら、私は普段高岡のキャンパスにおりますので、どうしても県の西側を中心に見て回っていることもあって、今回のお話は西側のものばかりになっていますけれども、わずかばかり見た感じでは東側にも魅力的な事例がたくさんあります。次の機会にはそういったものも含めてまたお話しできるようにしたいと思います。今日はその辺はごめんなさいということです。

1. 呉羽丘陵の梨園の景観

さて、早速幾つかご紹介していこうと思います。最初に、私が去年来て、４月の終わりごろに富山市の周辺地域でもドライブしようかなと思って、ふらふらと行ったところに呉羽丘陵というところがあります（スライド１）。この辺はファミリーパークもあるし、人がたくさん集まるところとして、富山の方であればよくご存じの場所だと思います。

基本的に丘陵地帯ですので、水の便が悪いところです。そういった水の便が悪いところをもともと何に使っていたかというと、江戸時代はお茶の産地でした。茶畑が丘陵地帯に広がっていました。ただ、お茶というのはどうしても他に有名なところがたくさんありますし、現金収入という意味ではちょっと心もとないこともあったのでしょう。明治 30 年ごろから篤農家の人が梨を育てることを考え始めまして、それでこの地域に梨の栽培が広まったといわれています。

現在、呉羽丘陵の西北部を中心として 155ha という結構広い範囲で、330 戸の農家が梨を生産されています。驚くべきことに 330 戸全てがエコファーマー認定を受けています。減農薬栽培ですね。こういった形で梨を栽培されていて、非常によくまとまって高い意識で生産をされている地域になっているようです。

実際にそこの風景をご覧いただきたいと思います（スライド２）。去年行ったときは花が咲いてきれいだったのですが、カメラをちゃんと用意していなくて、そのときの写真がありません。花が咲いている姿を想像してください。梨の花ですから、４月末から５月ごろまでが花の時期になりますけれども、丘陵地帯をちょっと上の方から眺めると、こんな感じになっていて、もちろん山の斜面にも梨畑があります。その下は平野の方まで一面に広がっています。

全国どこに行っても梨畑がこれほど連続しているところはあまりありません。千葉県が国内では最大の産地ですけれども、谷々にずっと分かれているような格好で、こんなに一面に見えるところはあまりないようです。そういった意味では、この富山の呉羽の梨畑はとてもよくまとまっていて、梨園という生業の風景が楽しめる面白い風景を作っている場所です。しかもちゃんとその歴史のある場所だというようなことに

なるわけです。

もう少し細かく見ていくと、いろいろと面白いことが出てきます。上杉先生のお話の中に歴史のつながりというお話がありました。さまざまな時代のものが積み重なりながら、今でもその様子が見える重層性といったものが大事だというお話でしたけれども、まさにこの呉羽丘陵には、そういう時代ごとの重なり合ったものがまだしっかり見える場所があるのです。

手前に写っているのがお茶です（スライド３）。恐らく江戸時代からずっと作られ続けていたであろう、丘陵地の水の少ないところでも栽培できる大事な作物だったお茶が、今も梨園の隙間にしっかり残っています。この写真の場所はまとまった形で残っていますが、あぜのような形になって残っているところなど、いろいろな残り方をしています。今のお茶産地はどこに行っても機械で摘みますから、もっと整形で真っすぐな畝のような形で作られているところが多いのですが、ここはこういう一株一株手で摘まないと取れないような株がまだまだ残っています。そういった江戸時代の姿、それから明治になって広まった梨園の姿といったものが見事に重層しているという非常に面白い景観ができているわけです。これはまさに文化的景観の代表的なスタイルといっていいのではないかと思います。

もう少し近づいて、梨園の中も見えるようなところまで行ってみると、このような感じです（スライド４）。高さはそれほど高くありません。人の頭のちょっと上ぐらいのところで剪定された格好の果樹園になります。こういった統一された形がまた一つ面白いのではないかと思います。当然時期になれば剪定が行われて、形が整えられます。これは聞いたわけではないのですが、恐らくこういった剪定されたものが地域の中では燃料として再利用されていくような、もののつながりというのもあるのではないかと思います。

こういった形で、まさに呉羽丘陵という土地の能力をうまく生かした使い方が、歴史的なつながりの中でうまく折り合っている風景というのを、この呉羽の梨園に見ることができます。残念ながら、梨に花が咲いている様子を一望できるようなところにカフェが建っていたりといった、うまい具合に活用されているところはそれほどありません。そういった環境で梨のデザートなどが食べられるところがあると非常にいい話題が作れるのではないかなと感じている次第です。

2. 高岡市福岡の菅田の景観

二つ目は、高岡市福岡地区です。旧福岡町ですけれども、こちらの菅田の景観です（スライド５）。これはご存じの方も多いかと思いますが、越中福岡には菅笠の製作技術が残っています。これは重要無形民俗文化財になっているわけですが、江戸時代の後期ごろから昭和の前半ぐらいまで、この地域は菅笠の一大産地だったわけです。もともと加賀藩が奨励して作ったものですので、加賀菅笠などと言われて、全国に出荷

されていたわけですが、まさにこの福岡地域が担っていたわけです。

この福岡という地域には小矢部川が流れていますが、この小矢部川の周辺の土地柄は、材料になるスゲが生育するのに適したちょっと水気の多いようなところが十分にありました。そういった自然環境を生かして自生するスゲ、あるいは栽培して作ったスゲを使って菅笠を作っていたのがこの地域です。

そういったスゲが育っている菅田の風景ももちろんなのですが、それに加えて、スゲを干す作業があります。8月ごろの非常に暑い時期に、収穫したスゲを乾燥させて、よく乾燥させたものを菅笠として編んでいきます。このスゲを一面に広げて干して作業をするスゲ干しがまた独特の風景を呈しています。

これはスゲ田の11月ごろの様子です（スライド6）。秋ぐらいに苗を取って、それを小さくして、こうやって田んぼに植え付けていきます。田んぼといっても、そんなに大きなところに植え付けるわけではなくて、山あいの小さな谷にあるこんなに小さい田んぼです。いつも水が湧いているところをうまく使って、こういう菅田が今も作られています。だいぶ少なくなったようですが、こういう形で残っているわけです。

これが翌年、夏中ずっと伸びて大きくなって、それを刈り取って乾燥させて、菅笠を編みます。まさにおばあちゃんの手ですね。これはまさに文化的景観的な「美しい手」でありますけれども、こうした田んぼで作られたスゲによって菅笠が作られていくわけです。

これはスゲを干しているときの様子です（スライド7）。タイミングが悪くてあまりいい場所が見つからなかったのですが、こういった形で円すい形というか、全体にきれいに日がよく当たるような格好で平らなところにスゲを広げて乾燥させていきます。いい時期になると、この地域一帯のあちこちで見られます。こうした特徴のある風景、地域らしさがまさに菅笠によってできているということになります。

3. 県西部のボカスギ人工林景観

次に、ボカスギというものがあります。富山県西部のボカスギの人工林景観です（スライド8）。これも私は非常に面白いと思いました。実は氷見の方ではボカスギとは言わず、「ひみ里山杉」と名乗ろうということで、頑張ってブランド化を進めていて、あまりボカスギという言葉を使ってはいけないことになっていますが、一応ここではもともとというか、なじみがある言葉としてボカスギという言葉を使わせてもらいます。非常に成長の早いタイプのスギということで、ぼかぼか太るからボカスギになったということです。

この起源は今のところまだはっきりしていないのですが、恐らく江戸時代末期ごろから、この地域を中心に植林され始めたと伝えられています。明治中期以降、非常に植林が進みました。この地域も山の資源というのはこの時期まであまり十分ではなくて、山もきちんと資源として使って、地域のためにしなければいけないということで、

明治以降にこのようにスギを植えて、将来に備えるといったことを企画したということです。

この時代以降、全国的に電柱材が大量に必要になっていった時期が来るわけですけれども、そういった時期に非常に成長が早くて、太い材をまとまって取れるボカスギが電柱の材料になりました。今では電柱はほとんどコンクリートになっていますが、少し前までは電柱は木材でした。その電柱の材料としてボカスギがこの地域から非常にたくさん出されて、それによってこの地域は非常に潤ったわけです。そういった歴史を持っています。

もう一つボカスギが面白いのは、今はスギの人工林の植林は、その目的のためだけに最初からかなり間隔を詰めて植えますけれども、ボカスギの最初の植え方はそうではなくて、まばらに植えて、そのまばらの間のところに、間作といいますけれども、他の作物の小豆や大豆、ソバといった焼き畑で作るような作物を育てて、スギが大きくなるまでそういったものを育てます。そういうふうに農業と林業が一体化したようなことをやっていたわけです。今はそういうやり方はほとんど残っていないのですが、そういった歴史的な農業経営、林業経営の姿を作り上げたのが、ボカスギという富山県西部地域の人工林の姿です。

これはボカスギを伐採した際の伐り株のアップですけれども、非常に成長が早い木です（スライド９）。年輪一つごとに１年成長しているわけですが、最初のうちに非常に大きくなっているのが何となくお分かりいただけると思います。こういった形で、植えてからすぐに電柱として使えるような大きさまでになってくれるので、それで当時としては非常に潤ったということです。

逆に成長が早いということは、材としてはあまり強くないということも意味していて、現在の規格に対応するような木材ではないということで、あまりいい印象を持たれていなかったわけです。現在「ひみ里山杉」を使おうとしている人たちはその特性を逆手に取って、こういった年輪が空いているような木はいろいろな薬剤や腐りにくくなるような材料が浸透しやすいということで、そういった使い方を積極的に提案することで、またボカスギを再興できないかということも考えているようです。

氷見などの富山県西部地域は、こういった低い丘陵地帯の合間に村々が入り込んでいて、そこに水田が広がるといった村の形を取っていますけれども、大体この丘陵地帯は遠目に見ればびっしりスギが植わっている形のところが多いです（スライド 10）。この多くがボカスギです。実はボカスギだけではなく、この辺はいわゆる地スギといわれている地元だけの品種のスギも実は結構植えられていて、そういったものも含めて富山県西部地域はスギの人工林の文化的景観という意味でも非常に面白いです。地域の人はいろいろなものを見極めながらというか、その土地との相性や材料としての良さといったものをうまく考えながら、こういった山を造っていったということが、こうした風景から読み取れるわけです。

4. 南砺福光の干柿生産の景観

私的に今日の一押しはこれです。南砺福光の干柿生産の景観です（スライド 11)。これは福光だけではなく、城端地域にも広がっていますけれども、南砺市の西南部ですね。この辺りで行われている干柿生産は富山を代表する文化的景観といってもいいのではないかと私は考えています。干柿は江戸時代初期に美濃から製法が伝わったとされています。前田利常の時代に加賀藩の殖産のために導入したといわれています。

この辺りは県境に医王山があって、そこから非常に乾いた冷たい風が吹き下ろしてくるところです。普通の作物からすると、そういうのはマイナスなのですが、柿を生産して、それを干柿に加工することに関しては非常に条件がいいということで、この地域で干柿生産が盛んになります。明治・大正ごろに生産量、品質ともに非常に向上を遂げて、全国に出荷されるようになっていきます。昭和 40 年代以降、この地域でもほかと同様水田の減反が進みますので、そういったところに柿をさらに植えていって、団地化が進んでいきました。それで産地が形成されています。現在は 250 戸の農家が年間 600 万個を生産しているといわれています。

ちょっと高台から見下ろすと、こういう景観になります（スライド 12)。比較的なだらかな丘陵地帯や、田んぼができないような棚田のようなところが現在、こういった柿畑、柿の果樹園になっています。これは秋の初めごろです。柿はまだぶら下がっていますけれども、もう少し後の時期になってくると、柿の葉自体も色づいて、なかなかきれいなところになっていきます。

中に入ると、こんな感じです（スライド 13)。よく剪定されていますので、非常に見通しのいい、こういった果樹園です。収穫はこのような機械に乗って高いところのものを取りますが、こういった仕組みを含めて、一つのシステムが出来上がっているということになります。

柿の品種は三社柿が主で、干柿の中では比較的大きいタイプのものです。干柿ですから、当然干さないといけないわけですが、昔は外に干していました。ただ、外で干すと、その年ごとの天候などで非常に不安定ですので、屋内で乾燥させることになって、各家庭にこういった透明なハウスが建てられることになります（スライド 14)。この辺も砺波平野の一番端にはなりますが散居村の一部で、先ほどのようなアズマダチの家があって、カイニョに囲まれたような家が立ち並んでいます。その一画に、この地域特有の構成要素として、こういった透明なハウスがそれぞれ入り込んでいるわけです。だから、これも柿が作り出した一つの文化的景観要素ということになります。

現在はさらに、これでも乾燥具合が十分ではないということで、赤外線乾燥にどんどん変わっていて、こういったハウスは納屋代わりに使われていることが多いようですけれども、そういうふうに技術の変遷によって生業の景観は移り変わっていきます。

もともとの姿がこういったものです（スライド 15)。干柿を窓に干しています。も

ともと外で干していたときはどうだったかというと、季節になると、スライド左側のような柿ハサ、つるし小屋をこの辺り一帯に建てていたという話です。このようにカヤで編んだ屋根で簡単に覆った簡素な小屋を、秋になると田んぼの中に作って、この中に干柿をつるして、それで乾燥させるわけです。こういったものが昔は辺り一面に立ち並んでいたということのようです。

今ここでおじいさんが一人で一所懸命作っていらっしゃいますが、この柿ハサを残しているのはこの１軒だけになってしまいました。今年は干しているところを見に行けなかったのですが、かろうじてこの家だけがやっていて、ある意味これはこの地域の風物詩ということで、季節を表す大事な景観として認識されているわけです。こういったものがこれからもしかしたらもっと積極的な意味で、この地域の景観を形作るものとして復活してくることも考えてもいいのではないかと思ったりしています。

5. その他の景観

他にも各地に棚田があります。それから、古代の荘園の名残りもあります。砺波の散居村では、田んぼの裏作のチューリップも立派な文化的景観に入ってきているのではないかと私は思っています。あと、農林業以外にも氷見に行けばブリ漁などで使われる大敷網といった漁業関連の景観も当然あります。立山山系に行けば、山から流れてくる非常に清らかだけど非常に冷たい水、たまに暴れるような水、そういったものをうまく利用したり、治水したりするような土地の利用の仕方があります。こういったものも富山を代表する文化的景観といっていいと思います。

あとは立山山系で雪形などというものもあります。春先になって山の雪の形に現れるものを見て、種をまいたり、苗代を作ったりする。そういった雪形というのも文化的景観として非常に重要なものだろうと思います。こんなふうに富山はちょっと行けばいろいろなものが文化的景観に見えてしまう。そういった地域だと思います。

6. 最後に

一つ一つは何気ない、みんな知っているかもしれない、やっている人にとっては当たり前のものかもしれませんが、こういった農林水産業のなりわいを続けることが実は非常に貴重で大事な風景を作り出している。そういった意識をもっと持っていいのではないかと思うのです。そういう意識を持つと、その風景が見えるところで自分たちの作っているものを味わってもらったりするような形にも発展していくでしょうし、地域をもっとうまく伝える道筋につながるような気がしています。そのような形で、なりわいそのものを単に生産物だけを作っているのではなくて、風景も作っているのだと認識することによって、非常にすぐれた地域らしさが作られているのだということをもっと意識してもいいのではないかと思います。

そして、今ご紹介したような富山のなりわいの風景が数十年後になりわいとして

ちゃんと生き続けながら、そのときに文化的な価値のある風景としてもしっかりリスペクトされている。あるものは重要文化的景観になっているかもしれないし、あるものは別の形で守られているかもしれませんが、そういった形でしっかりつながっているといいなと期待しています。

私からの話題提供は以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

（拍手）

スライド一覧

スライド１

スライド２

スライド３

スライド４

スライド５

スライド６

スライド７

スライド８

スライド 9

スライド 10

スライド 11

スライド 12

スライド 13

スライド 14

スライド 15